

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第10号 #
南九州城郭談話会報 #
平成11(1999)年5月20日発行 #
#####

都城市森田御陣について (後編)

米澤英昭

②史料からみた『御陣』

a)『御陣』の登場・様子

森田御陣が史料に登場するのは、志和池城攻略にかかる頃、つまり慶長4年10月頃のことである。「家久公御譜中」(『旧記』後編3-919)では「志和池城邊有稱森田要地、十月二日、進築陣営」となっており、11月24日付忠恒宛義弘書状(『旧記』後編3-957)でも「去月二日庄内しわち・野・美谷之間二被成着陣、」となっている。また、「北郷忠能公譜中」(『旧記』後編3-915)には「同年十月五日太守忠恒公移陣于森田、」,「新納忠元勲功記」(『旧記』後編3-997)には「同年十月五日(二日とも)、又御陣を森田に被為移、」とある。なお、北郷三久が6日から陣取を開始した記述(『旧記』後編3-928)や、島津豊久が2日に着陣した記載(『旧記』後編3-946)もある。このように史料によってわずかな日付の相違はあるものの、10月前半には各陣が構築されたものと考えられる。

御陣や志和池城・その周囲の様子を記したものも幾つかある。

A (前略) 去ハ上野隼人・逆瀬川豊前兩人ハ御陣中之普請奉行シ差當り候ヘハ、山田城至佛除、新敷普請仕調御番衆御盛二而、頓而森田ノ御陳參調候而、志和池城二相之垣を結廻し、外二ハ堀ヲはり、打菱ヲ

まき、しよりを付てねり、弓箭二 成候也、(後略)

B (前略) 次しハちの城被取詰、あいのかき其外二大堀をほらせ、内場より少もかもい無之様に念を入られ候由、(後略)

Aは「上野隼人覚書」(『旧記』後編3-829)である。上野と逆瀬川は御陣の普請に参加しており、この時彼等は志和池城付近での「相之垣を結廻し、外二ハ堀ヲはり、打菱ヲまき、しよりを付」けるという土木工事ののち、合戦にのぞんだようである。Bは2月1日付忠恒宛義弘書状(『旧記』後編3-1030)の一部で、やはり大堀を構築するなどの工事を行っていることがわかる。

b) 従軍諸将について

絵図には、北郷・長寿院・豊久・入来院・以久の諸将の名があるが、従軍したのはこれのみではない。11月24日付島津忠恒宛義弘書状(『旧記』後編3-957)に次のような記載がある。

(前略)

一去月二日庄内しわち・野・美谷之間二被成着陣、則図書頭を始れきれき在陣させられ候由、目出令存候、しわち竈城之鉢、こまこま書載之趣、さこそと存計候、(後略)

「庄内しわち・野々美谷之間」つまり森田には島津家家老図書頭忠長を始め、「れきれき」が在陣していた。山本博文氏によると、その「れきれき」とは先に述べた5名と、種子島久時・根占重政・喜入忠政らの一所持（大身の家臣）、伊集院久治（抱節）・鎌田政近・比志島国貞らの家老、平田増宗（郡山・吉田地頭）・新納忠元（大口地頭）・樺山久高（志布志地頭）・山田有栄（福山地頭）・寺山久兼（市成地頭）・柏原有国（松山地頭）らの地頭衆といった、島津家の最有力家臣たちである。庄内の乱とはまさしく島津氏の総力をあげた戦いであった。

③発掘調査からみた御陣

御陣は平成4年度に一部ではあるが御陣（本陣）に比定される部分が発掘された。調査面積は324㎡。該地は山林で、台地端へ向かって幅約7mの箱堀状の溝があり、その東側に土塁もしくは櫓台かと思われる盛土が認められた。15世紀後半に噴出したと思われる桜島文明軽石を含む地層の上に、約1.2mの厚さの、土塁もしくは櫓台かと思われる盛土（箱堀状の溝を掘り下げた際に排出された御池軽石や黒色土からなる）が一気に積み上げられていることがわかったのである。なお、箱堀状の溝内に堆積した流れ込み土を取り除くとその最下部には硬くしまった層が認められた。そこは、道路として使用されていたものと思われる。堀底から土塁の頂上までは高さ4mを測る。往時の御陣の様子を十分にしのばせるものである。

3 さいごに

庄内の乱は、島津家において最大の危機であり、御家存亡にも関わるものであった。そしてそれは、この頃豊臣政権内において権力を増大させつつあった徳川家康の、関ヶ原の戦へむけての予行演習とも思える九州諸大名の動員によってさらに色濃くなる。このよう

な状況の中で築かれた森田御陣は、精緻で攻撃的な構造を持ち、また絵図・現況から、南九州では特異な畿内タイプの要素を有する城郭である。

千田嘉博氏はこの御陣と志和池城に関して、「これ程、合戦に際して築かれた陣城が、広範囲にわたって良好に遺存し、詳細な史料群によって跡づけられる例はまれである」としており、貴重な文化財として位置づけている。このような遺跡が正しく後世へ伝わるよう願うものである。

《注》 本稿をまとめるにあたり、栗畑光博氏より貴重な発掘成果資料をいただいた。ここに記して謝する。

《参考文献》

『旧記雑録』後編3（『鹿児島県史料』）

重永卓爾『都城島津家史料』第三卷（都城市立図書館 1989）

『庄内軍記』（都城市立図書館 1975）

中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻（日本学術振興会 1958）

山本博文『島津義弘の賭け』（読売新聞社 1997）

千田嘉博・栗畑光博『都城市の中世城館』（都城市文化財調査報告書第45集 1998）



第10回見学会（志布志城跡）

◆◆第10回見学会・例会報告◆◆

下 鶴 弘

■ 見学会

正月気分も覚めやらぬ1月10日朝、小雨まじりの中を今年最初の見学会が実施された。

参加者は予想を上回る約90名が志布志町文化会館へ集まり、受付後に各自の車に分乗して志布志城跡に向かった。志布志城は伝統ある志布志小学校の背後にあり、学校と山城が一体となった感がある。現地では、志布志町教育委員会の坂元正知さんに案内を請うた。

参加者の多くは、県黎明館の立体模型でその全容をご存じであったようだが、改めて規模の宏大さに歓声が上がっていた。

広義の志布志城は、志布志の中心地区を取り囲む内城・松尾城・高城・新城の総称である。今回踏査した内城は、南北朝から天正5年までのおよそ四百年間、豪族の興亡を見続けてきた、最も歴史のある山城である。

志布志城(内城)跡の立地は、北東から南西に延びた細長い丘陵の先端部にあり、北東部のみ台地につながっているため、ここに堀切を設け、山城を独立させている。

曲輪の基本形は、深い空堀で仕切った上、さらに浅い堀で二つに分割し、浅い堀の中央付近で両側の曲輪の虎口につながる形である。特に各曲輪を独立させる深い空堀は、県内屈指の見事なものであった。また、本丸には大きな土塁があり、北の隅は大きく張り出し、高さ4メートルの櫓台となっている。(当日はここで会員の記念写真を撮った。) 築城が宏大であるため、そのすべてを踏査することはできなかったが、参加者の皆さんは十分に城跡の散策を堪能することができた。

感想として、城跡は全体に良く原形をとどめており、地元の方々の熱心な保存活動がうかがわれた。当日までに手入れがなされてお

り城内は大変歩きやすく、会員の皆さんも余裕を持って解説に耳を傾けていた。

■ 例 会

例会は鶴島会員の司会により下記順番に行われた(一部発表内容は割愛させていただきます)。

1 三木靖会長「日向国志布志城の変遷」

志布志内城は歴史的にも遺構的にも学術的にも注目に値する城郭である。それに加えて、平成2年以来、志布志町当局と住民とが「歴史のまちづくり委員会」を結成し、その活動の中で、五本柱の一つと位置付けて、その保存・活用について広く検討し、町教育委員会は当地域の調査、地形図、縄張り図の作成に努め、平成5年2月に県文化財保護委員会により県の史跡に指定となった。これらの経緯からも分かるように県内でも、地元がその保存と活用に最も力を尽くしている城郭の一つとして評価が高い。県内の中世城郭としては、最大級の復元模型が平成8年に黎明館に設置され、公開されているが、それは志布志内城の戦国後期、天正2(1574)年正月16日肝付勢が勢揃いした時点の景観を想定したものである(本会報3号参照)。

2 福田泰典会員「内城について」

3 上田耕会員「知覧城跡の発掘調査」

平成10年度の発掘調査の結果報告があった(5頁参照)。

4 各地の城郭調査の現状

- ・八木澤一郎会員「鹿児島県内の状況」
- ・桒畑光博会員「宮崎県内の状況」
- ・鶴島俊彦会員「熊本県内の状況」

5 鹿児島新報社「新聞の山城特集の紹介」

◆◆第11回見学会・例会報告◆◆

橋 口 亘

第11回見学会は、初めて南九州を離れ、大分県大野郡三重町の松尾城跡で3月7日に行われた。雨天ながら約30名の参加者が集まり、中には熱風邪の身で参加した強兵の会員も……。集合場所のホテルフロントで三木靖会長より松尾城をめぐる歴史についての説明が行われた後、現地へ。今回現地では大分県教育委員会の小柳昭宏・五十川雄也の両氏にご案内等諸事に亘ってお世話いただいた。

松尾城は豊薩戦争の際、天正14年(1586)～半年間の間、島津軍の前線基地として使用されたことのある山城である。普段見慣れているシラス台地分断型の城と違い、急傾斜の尾根筋に展開する曲輪群が印象的な城であった。城南側最頂部に主郭とみられる曲輪があり、この付近から北西方向に下って二股に分かれている尾根にはそれぞれ階段状に曲輪が造成されている。二条の尾根に挟まれた谷部分にも曲輪がつくられその山麓付近には居館部を思わせる広いスペースがある。城の処々岩盤が露出しており、山麓部にはこのような岩盤を利用した土塁状の部分もある。急傾斜の山道は雨天のせいもあって歩きにくく、思わず転んでしまった(この時笑っていた友人も後で階段から滑り落ちた)。

土の堆積が少ないのか、城のあちこちでは遺物が埋まらずに残っている。今回見学会初参加の会員の一人は完形に近い石臼を見つけていた。備前焼の瓶や、景德鎮系・章洲窯系青花などの国内外産陶磁器片も多数散布している。青花は16世紀後半頃のものが多く見かけられた。

結局、降る雨も忘れての約3時間の現地見学となったが、途中吉祥寺のご住職のご厚意で、当寺に伝わる諸仏像を拝観できるなどの幸運

もあった。このあと三重町の中央公民館では三重町教育委員会の諸岡郁氏にお世話いただき松尾城の採集遺物を見学し、ここで解散ということになった。

城の各処にいまだに埋まらずに残っていた数々の遺物の中には、退却する島津軍の置き去りにしたものもあるのだろうか……。400年以上も昔の緊迫した情景が生々しく伝わってくるような見学会であった。



松尾城にて

お 知 ら せ

- ◆ 第13回の見学会・例会は9月中旬熊本県で開催の予定。
- ◆ 第7回例会資料集「加藤清正と近世南九州の城」(65頁)、会報「南九州の城郭」第1～5号(合冊)予約受付中、いずれも1,000円です。事務局まで。
- ◆ 川元茂信会員が南九州城郭談話会のホームページを開設！
URL <http://www.satsuma.nejp/myhome/kawamoto/danwa.html>

知覧城跡の大空堀、堀底を確認

上 田 耕

日本列島では中世に多くの城が築かれた。その中でも、シラス台地を空堀で縦横に分断し、個々の曲輪が独立的で、なおかつ巨大な規模をもつ城跡の一群が南九州には数多く残っている。知覧城跡はそれらを代表する城として平成5年に国の史跡として指定された。

以来、保護修復、活用など様々な検討がなされ、平成9年には、長期にわたる保存整備の基本計画が策定された。それに基づき、平成10年度より保存整備事業に着手、発掘調査が行われている。

今回の発掘調査は、本丸跡を取巻く大空堀の堀底形態や施設の有無、並びに築城・改修時の年代の解明、併せて、整備に伴う排水溝設置の問題など基礎的データを得るために実施された。

発掘調査は、本丸跡を取巻く大空堀に5つの試掘溝を設けた。調査面積は189㎡。

第1・第2試掘地点は、東ノ柵と本丸跡の間の大空堀である。

調査では、地表面から約3mの深さの包含層から古墳時代の土器と共に青磁・白磁・土師器・褐釉陶器などが混在して出土しており、その貿易陶磁器の年代は14世紀後半～15世紀前半時期のものであった。

包含層直下からは湧水があり、それ以上の発掘調査は断念したが、当時の人々がこの湧水を見逃すはずはなく、利用された可能性を想定したい。

第5試掘地点は、今城と本丸の間の空堀の最も狭小な地点である。

地表面から当時の堀底まで約4.7m、最も深い場所で約6mあった。この深さは今日残存する本丸の外柵形の虎口遺構のレベルとほぼ一致していることが判明。

第5試掘地点の空堀は長い間に相当量の土砂が堆積していたことがわかった。ここは、

当城の本丸に至る搦手側の重要な地点である。このことは、今城側に腰曲輪が付帯されていることからわかる。

空堀底からも門あるいは柵状施設の存在を示唆する柱跡が検出されたことから防備強化がうかがえ、いったん侵入してきた敵をこの場で留め、腰曲輪から攻撃ができる体勢が計られていた可能性がある。

柱穴遺構の周辺前から直径約20cm大の投石用と考えられる河原石が多数検出されたのも、これを裏付けている。

なお、この試掘溝からは14世紀代から15世紀代の中国製の青磁碗・皿、白磁皿、高麗磁器や土師器皿、鉄くぎ、鍛冶滓、青銅製品、珊瑚礁片などが出土している。空堀底の地層からは、ムギ類の籾殻の表皮細胞が検出されており、注目される。

平成4年の本曲輪の発掘調査で出土した貿易陶磁器遺物は、16世紀代のものが大半を占めていたのに対して、本丸下の大空堀からは16世紀代の貿易陶磁器遺物は、わずかに検出されている程度に過ぎない。

16世紀代に本丸曲輪が改修され、それに伴い、空堀底に土砂が投棄されたと推測もできる。検討を必要とするが、本丸曲輪の造成に関わり興味深い。



本丸下の空堀底断面
(知覧町教育委員会提供)

南九州城郭談話会のあゆみ

第1回見学会・例会、設立総会

平成7年12月3日(日)

鹿児島県大口市(大口市ふれあいセンター)

参加者数 25名

見学会：関白陣跡

設立総会及び例会

①関白陣について(三木靖)

②知覧城跡の現状と保存活用(上田耕)

参加者数 約60名

見学会：佐敷城跡

総会及び例会

①近世初頭肥後の破城と築城(鶴嶋俊彦)

②熊本城跡(赤星雄一)

③宇土城跡(木下洋介)

④八代城跡(吉永明)

⑤佐敷城跡(深川祐二)

⑥水俣城跡(坂元裕子)

⑦その他の近世初頭期の城郭(鶴嶋俊彦)

第2回見学会・例会

平成8年3月20日(休)

鹿児島県始良町(始良町中央公民館)

参加者数 約70名

見学会：岩剣城跡、建昌城跡

例会

①高原城跡について(大学康弘)

②建昌城跡について(下鶴弘)

第3回見学会・例会

平成8年6月9日(日)

宮崎県佐土原町(佐土原地区公民館)

参加者数 約90名

見学会：佐土原城跡、佐土原歴史資料館鶴松館及び出土文化財管理センター

例会

①宮崎県の中近世城館調査(北郷泰道)

②高鍋城跡の腰曲輪状の平坦地の調査(吉本正典)

③佐土原城の調査(木村明史)

第4回見学会・例会

平成8年9月29日(日)

熊本県人吉市(相良神社参集殿)

参加者数 約50名

見学会：人吉城跡

例会

①肥後国球磨郡の城郭(鶴嶋俊彦)

第5回見学会・例会、総会

平成9年2月11日(火)

鹿児島県頴娃町(頴娃町民会館)

参加者数 約60名

見学会：頴娃城跡

総会及び例会

①頴娃城跡について(前田勇)

②各地の城館調査について(北郷泰道、下鶴弘)

第8回見学会・例会、総会

平成10年2月15日(日)

鹿児島県知覧町(ミュージアム知覧)

参加者数 約90名

見学会：知覧城跡

総会及び例会

①知覧城跡調査と城下の変遷(上田耕)

②加世田別府城関連城郭の配置と新城東部分縄張りについて(橋口亘)

③都城市の中世城館2例(栗畑光博)

④江戸初期、人吉城跡検出の地下室(鶴嶋俊彦)

⑤各地の城郭調査の現状(重久淳一、山崎克之)

第9回見学会・例会

平成10年6月28日(日)

宮崎県高千穂町(高千穂町コミュニティセンター)

参加者数 約50名

見学会：亀山城跡、亀頭山城跡

例会

①延岡城跡について(吉本正典)

②高千穂町の中世城郭について、中世城郭研究の民俗学的アプローチのすすめ(緒方俊輔)

第10回見学会・例会

平成11年1月10日(日)

鹿児島県志布志町(志布志町文化会館)

参加者数 約90名

見学会：志布志城跡

例会

①日向国志布志城の変遷(三木靖)

②内城について(福田泰典)

③知覧城跡の発掘調査(上田耕)

④各地の城郭調査の現状(八木澤一郎、栗畑光博、鶴嶋俊彦)

⑤新聞の山城特集の紹介(鹿児島新報社)

第6回見学会

平成9年6月28日(日)

宮崎県高岡町

参加者数 約50名

見学会：穆佐城跡、倉岡城跡

第7回見学会・例会

平成9年9月28日(日)

熊本県芦北町(芦北町社会教育センター)

第11回見学会

平成11年3月7日(日)

大分県三重町

参加者数 約30名

見学会：松尾城跡

高千穂町の中世城郭（後編）

緒 方 俊 輔

(20) 桑水流陣内（くわづるじんない）

桑水流集落の高い所にある陣内松男氏、田崎スミ子氏宅を「陣内」という屋号で呼んでいた。その下にある屋号「園」の陣内ミキオ氏宅との間には寺があったと伝えられ、「堂の脇」「堂の上」「屋敷」等の地名が残る。

(21) 押方城（おしかたじょう）

高千穂 48 塁の 1 つ「押方城」。現在の地福寺地藏堂のあるあたりと推定される。城主は甲斐若狭守鑑昌。

(22) 太鼓原（たいこばる）

現在の観光地「国見ヶ丘」の南側の高台。方形の曲輪らしい高台があり、その上に「太鼓番の墓」と伝えられる墓がある。三田井親武のおばが住んでいたと伝えられる片内集落はすぐ西南麓にある。

(23) 芝原圀（しばはらかこい）

宮崎県指定史跡「吉野朝勤王家、柴原又三郎の墓」がある。「圀」「垣内」「堂屋敷」「駅」「宮ん元」「園」「小屋」「上西」「下西」「堂ん下」等の屋号が残るが、堀や土塁等の遺構は不明。五ヶ瀬町の桑野内圀（くわのうちかこい）にも柴原又三郎入道性虎の居館と墓があるが、こちらには曲輪や空堀が残る。

(24) 中山城（なかやまじょう）三田井氏居館（みたいしきょかん）

高千穂 48 塁の 1 つ「中山城」。「仲山城」と書いてある文献もある。大字三田井とは、五箇瀬川峡谷（高千穂峡）の天然の濠によって分断され、背後も諸塚山の山地によって囲まれた非常に守りの堅い立地条件の城である。高千穂太郎の墓のある尾根自体も城郭の一部

と考えられ、賀志原城や椎屋谷城（稲荷城）等と一連の大城郭群を形成している。「義雲寺」「宿千軒」「引地」「城やしき」「御内の御所」「親貞やしき」「重武やしき」「立馬場」「西ノ馬場」等の地名が残っている。また、重臣・家老・脇侍の屋敷跡の場所も現在まで語り継がれている。農地整備によって開墾されており、土塁や堀は明確ではないが、高千穂太郎の墓がある尾根の付け根部分等に堀が残る。

(25) 賀志原城（かしはらじょう）

高千穂 48 塁の 1 つ「賀志原城」。中山城を見下ろす高所にある。

(26) 椎屋谷城（しいやだにじょう）稲荷城（いなりじょう）

中山城、賀志原城とともに大城郭群を形成している。農地整備によって開墾されており、土塁や堀は明確でない。

(27) 黒仁田城（くろにたじょう）

高千穂 48 塁の 1 つ「黒仁田城」。「御座」「圀」「上小倉」「下小倉」「馬場」「前園」「堂屋敷」「宇土の水」「横河水神」等の屋号が残る。城主は甲斐親秀。近年まで「むぞやかわいや黒仁田殿は朝呑み酒で殺された」という子守歌の歌詞にも城主の暗殺が語り継がれている。

(28) 谷城（たにじょう）

「高千穂町字図」に字が残る。農地整備によって開墾されており、土塁や堀は明確ではない。

(29) 城ヶ崎（じょうがさき）

「高千穂町字図」に字が残る。農地整備によって開墾されており、土塁や堀は明確ではない。

(30) 上ノ切若狭屋敷 (じょうのきりわか さやしき)

若狭守は、秋元の屋号が「上ノ切の上」の飯干孝明氏宅の祖先にあたると伝えられている。飯干姓は菊池一族の家臣で、諸塚村の飯干地区から移住してきたと伝えられており、「諸塚村史」にも若狭守の伝説が共通して残っている。また、飯干光雄氏宅の屋号は、「上ノ切の中」である。このほか、秋元の津隈重幸氏宅に「うえんしろ」の屋号が残るが、「上の城」なのか「上の後ろ」なのか定かでない。

以上が、「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書・分布地図編」1998年に紹介された城のおよその説明である。考古学のみならず屋号等の民俗学的内容も多く残っているのも、奥日向の特徴と言えると思う。

北郷泰道氏によると、「宮崎県の山城は、県北は鎖形に連結する曲輪で、県南は台地の端部を切断する曲輪のことが多い」そうであるが、高千穂町では、県北ではあるが、県北タイプの玄武城と県南タイプの亀山城・亀頭山城等両タイプとも存在する。

広大な面積の上、険しい山地のため調査が進んでいる城は今のところ非常に少ない。しかしながら、今後とも可能な限り調査を進めて行きたいので、諸先生方のご指導・ご助言を御願いいたします。

【新入会員】 (5月15日現在)

有川 貞史	岩下 方成	大庭 康時
小濱 義経	上村 治史	新村 一志
関屋 泰信	那加野久廣	野村 尚道
肥後 芳尚		

事務局便り

募 集 !

◎機関誌『南九州城郭研究』第2号の原稿募集

1. 論文 400字×50枚程度(図版・註を含む)
2. 研究ノート400字×20枚程度(図版・註を含む)
3. 史料紹介 400字×5~20枚、短くても可

第12回 見学会・例会・総会 案内

日 時	平成11年6月27日(日) 10:00 ~ 15:00
集合場所	都城歴史資料館前庭 (宮崎県都城市)
交通案内	J R 日豊本線西都城駅 徒歩 20 分
会 順	(1) 見学会 10:00 集 合 10:10 都之城跡見学 12:00 昼 食 (五十市地区公民館) ※希望者は弁当を受け取ります。 (2) 総会・例会 13:00 総会 13:30 研究発表・質疑応答 ・都之城跡の発掘調査 ・各地の城館調査報告 15:00 解 散

編集後記

◆会報も第10号となりました。会が発足して3年半での達成です。そこで、今号には今までの会のあゆみをまとめてみました。南九州3県のみならず、大分県までが見学先となりました。それぞれが皆様方にとって、思い出深い場所となり、また、本誌が少しは城郭についての情報を提供できたかと感じております。今後とも、本会及び本誌充実のため、御協力をお願い致します。

◆今号には、米澤英昭氏の「森田御陣」及び緒方俊輔氏の「高千穂町の中世城郭」の後半部分を掲載しました。両氏には、分割になったことさらに発行が遅れたことをお詫びいたしました。

◆次号の会報発行は、9月上旬の予定です。

(Shige)

南九州の城郭 第10号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕気付
南九州城郭談話会
(振替口座 02040-6-37850)
発行者 三木 靖
印刷所 (株)トライ社
入会金 500 円 年会費 1,000 円